

医療・福祉問う「えにしメール」

発信23年、メル友ふくらみ3000人

大熊由紀子

◆認知症薬として大きく報じられたレカネマブ／効果が疑問・有害事象が高頻度・行政が援助すべきは別の領域

◆子宮頸がんワクチン接種勧奨再開で、新たな被害者が(涙)川田龍平さんも登場してシンポ。オンライン参加も可能

◆「身体拘束をやめたい」精神科病院のナース、作業療法士が「医療従事者の会」を設立／武見厚夫大臣に要望書

原稿の「依頼を受けた十月十日に発信した連称「えにしメール」のミダシです。医療・福祉や研究現場の志ある方々、霞が関、永田町、自治体の要職にある人など十人カ国少なく見積もって三千人ほどの方々が、週一回のこの「えにしメール」を楽しみにしてくださり、メルアドが変わるとすぐに連絡していただきます。

認知症薬レカネマブ効果疑問

子宮頸がんワクチンで被害者

精神科ナース拘束やめたい

それには、わけがあります。大手メディアが載せようとしないうちで、日がたつに従って重要さが増していく、冒頭のミダシのようなニュースが載っているからです。

「えにしメール」は、朝日新聞という発信の場を失った

二〇〇一年に始めたので二十三年めになります。

同じ年に始まったのが、福祉と医療、現場と政策の「新たなえにし」を紡ぎ集めます。大阪大学への旅立ちを祝って集まってくださった三百人余の方々は、いずれも、私とは電話一本

でつながる方です。けれど、この日集まったのは、医療、福祉そして行政と、お互い、まるで違う文化の住人。でも話してみると面白い、というので「来年もまたこのプレスセンターで会いたい」というのはなしに発展しました。

ことし九月の第二十三回のえにし・シンポジウムのテーマは、「夢・願い・怒り／ボランティア」と国会議員の凄さ・面白さ」と「精神医療の闇／生み出す構造と改革への道」でした。

二つめのシンポには、朝日読売、東京、NHK、東洋経済、普及はライバルのジャーナリストが登壇し、志を共有し合いました。参加して、この出会いに、感動した出版社の方が、出版不況の中、本にしてくださることにになりました。



おおくまゆきこ

略歴

一九六三年朝日新聞入社
東京オリピック女子選手村取材
一九六五年科学部
一九八四年論説委員

コロナのせいで二〇二〇年からズームになりました。がつかりしていたら、思いがけないことに大好評なのです。海外に住んでいる方、ベッドから起きられない難病の方も参加できるようになったからです。東京までの交通費がいらないので嬉しいという声まで。

8つのシキタリ

- 【1】どんなに高名な人でも、「講演料ナシ」
- 【2】登壇は「権利」なので、「二生に一度」だけが原則
- 【3】モットーは前例を破ること
- 【4】集いには、毎回、*hosts*が
- 【5】裏方仕事は、全員ボランティア
- 【6】目や耳が不自由な方のために、手話、磁気テープ、指文字で情報保障
- 【7】スポンサーは一切なし
- 【8】「えにし結び名簿」、席は籤引き

二〇〇一年大阪大学大学院教授
二〇〇四年から国際医療福祉大学大学院医療福祉ジャーナリズム分野教授
著書に『寝たきり老人』のいる国はない国』『福祉を変える医療を変える／日本を変えるとした社説＋α』
『恐るる所にボランティアを』『物語・介護保険』『誇り・味方・居場所／私の社会保険論』他

この「えにし」の会には、八つのシキタリがあります。
二十三年もつづけているので、この「シキタリ」、すっかり定着しました。たとえば「地域包括ケア」シンポのバネリストは、カラちゃん、たんちゃん、はなちゃん、ただちゃん、さるちゃん、もりちゃんと呼び合って打合せ段階から盛り上がり、同志になってしましました。厚労省局長、認知症の本人、お医者さん、歯医者さん、ノーシャルワーカーなど職種はまったく違い、それまで、会ったことがなかった方々です。
「前例を超える創る」がモットーのこの「集い」で、認知症やLGBTの本人が次々と登壇したからでしょうか。その後ジャーナリストが安心して取り上げるようになり(14面)続く



トークセッション タブーへの挑戦
縁(えにし)を結ぶ会の集い

ました。
集いに毎年参加してくださる方のあいだに、「えにしのシキタリ」が広がっていることに最近、気がつきました。部長、先生はよく肩書きで呼ぶのを、法

度にして、ファーストネームでよびあうと、新しい絆を発想が生れるのをぞうです。
朝日新聞という発信の場を失ってから始めた三つ目の試みは、大阪大学の教えた子たちが



孤児院で育ったサヘル・ローズさんと
児童福祉法抜本改正をすすめた しおちゃん、塩崎大臣と現場の人たち

つくってくれた「えにし」のホームページ <http://www.yuki-enishi.com/> (ゆきえにしで検索すると先頭に)です。いま、数えてみたら、部屋数はなんと五十一に増えていま

した。
朝日新聞時代の記事の延長線にある「メディアと冤罪の部屋」「医療事故から学ぶ部屋」のような硬い部屋だけでなく、「優しき挑戦者の部屋」「らうんじ

えにし」のような、ほっこりする部屋も。
そして、大学の教員になってからはじめた公開講義シリーズ「前例を超える前例を創る」に登場して下さった方々の記録や、大学院生の修士論文や博士論文を紹介する部屋も。
八十三歳になったいまも、このようなことを続けているのはなぜだろう。この原稿を書かせていただいて、はっと気づいたことがあります。
三つの活動のすべては、朝日新聞で最初に出会った支局長の影響だったのです。
中野駅前で一階が焼き鳥屋というビルの二階の支局に恐る恐る入ったときのことです。浅黒い顔の支局長が、新しい罫線の住所録をテーブルに置いて、厳かに口を開きました。
「これからここに書く人たちが、君の財産」
住所録はポロボロになり、新聞社を卒業するときにはパソコンの住所録になり、数えてみたら五千人近くになっていた。朝起きた事件を多方には説得力ある社説に仕上げなければならぬ。そんなとき、この「財産」に何度、助けられたことか。
支局長は続けました。「十を

取材し、丸捨てて、一を書くこと。一を聞いて十を知るヤツは記者としては落第だ」
この二つの教が骨の髄までしみこんだ結果が、「えにしメール」に「えにしのホームページ」に「えにしの集い」だったようです。
「恵まれない施設の子に、プールの贈り物」と書いて、ひどく叱られたときのことも忘れられません。
「恵まれない子」という文字をその子たちが読んだ時、どんな気持ちになるか、想像してみたのか」
医療や介護の記事を書くときは、医療や介護を「受ける身」のことをまず考えてしまう。それは、あのかの竹内広支局長の怖い顔のせいかもしれせん。
信じやすく、認知症の新薬を報じるニュースに飛びついて後悔するに違いない人。
子宮頸がんワクチンの後遺症で人生を台無しにされた女性、精神病院で縛られている人たち。
それが、大手メディアが書くこととしない「えにしメール」のテーマについての冒頭の記事のミダシにつながっているようにおもいます。